



焼き場の前に立つ少年

南帷子小学校長 堀田 誠

朝6時に起床し、眠たい目をこすりながらラジオ体操にでかけます。集会所にはたくさんの小学生が集まっています。「新しい朝が来た。希望の朝だ。…」とラジオからいつものようにメロディが流れ、一日のスタートです。帰宅して朝食を食べて、「涼しいうちに勉強しなさい」と言われていたので、勉強をします。9:30からテレビの時間です。「海のトリトン」「不思議なメルモ」「妖怪人間ベム」「黄金バット」を毎年飽きることなくみていました。その後、昼食を済ませ、分団場所へ行きます。午後からは学校のプールに出かけます。

15:30ごろに終わり、帰宅します。まだ暑いので、道路に曇気楼がみえました。帰ったら昼寝です。夕方に目を覚ませ、そして夕食、お風呂をすませると、夜の7時ぐらいです。その後、野球中継を見て、8時30分ごろに、一日の日記（当時は宿題でした）を書いてから、就寝です。毎日があまり変化のないリズムで夏休みを過ごした記憶です。

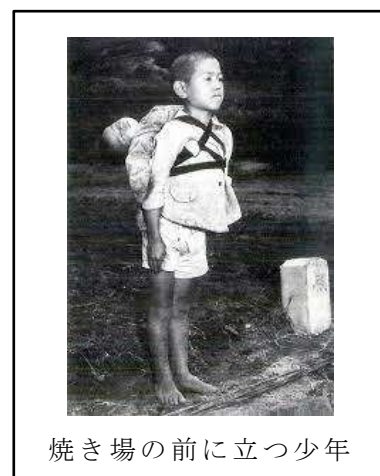
右の写真は、今から約80年前に、アメリカの従軍カメラマンとして、戦後の長崎へ来たジョー・オダネル氏が撮影したものです。オダネル氏は、真珠湾攻撃で日本への復讐のために軍に志願しました。原爆が投下された長崎を目のあたりにして、彼の価値観が変わりました。象徴的なのは右の少年との出会いでした。少年は赤ちゃんをおぶっています。その赤ちゃんの命はありません。焼き場の大人に引き渡し、少しの間、歯を食いしばって眺めていたと言います。そのやるせなさ、悔しさをぐっところえている姿が、この写真をみた人々の感銘を受けます。オダネル氏はこの写真を数十年、屋根裏に封印していたそうです。個人のカメラで撮影するのは軍律違反で、アメリカは原爆投下を正当化していたからです。しかし、ある時、このパンドラの箱を開けたのです。

「原爆投下は必要だったのか」と世の中の人々に訴えたのです。勿論、アメリカ国民からのバッシングで、彼の家の中傷の手紙が殺到します。しかし、一人だけが彼を擁護しました。「オダネルを批判する前に、図書館へ行け」と、長崎で起こった事実を知るべきだと書いた手紙の主は、オダネル氏の息子でした。オダネル氏は数年前の8月9日に亡くなり、彼の意志は息子に引き継がれています。今年も、広島と長崎で慰霊祭が行われます。可児市でも、8月6日 8:15、そして8月9日 11:02に黙祷を捧げるサイレンが鳴ります。それは、原爆が投下された時刻です。

明日から夏休みです。充実した夏休みを過ごし、8月29日に、「いつもと変わらない元気な姿で会えること」を願っています。



毎日、朝顔が咲きます



焼き場の前に立つ少年